

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K13912

研究課題名（和文）尊敬の3つのモードの発達過程と促進要因を探る 学校教師の役割に着目して

研究課題名（英文）How three modes of respect develop and how they are promoted by school teachers

研究代表者

武藤 世良 (Muto, Sera)

お茶の水女子大学・基幹研究院・講師

研究者番号：30785895

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では人が学び育ち他者と良好な関係性を築く上で重要な尊敬（respect）に関して、尊敬には義務尊敬（尊重）・感情的態度尊敬（特定人物に抱き続ける尊敬）・感情状態尊敬（一時的な尊敬）の3つのモードがあると捉え、特に学校教師の役割に着目し、それぞれの発達過程と促進要因を解明することを目的とした。3つの課題を検討した結果、（1）尊敬の標準的発達に関して、小学生は中高生よりも感情状態尊敬を経験しやすいこと、（2）保護者の教師に関する信念や言葉がけが潜在的に教師への尊敬の規定因の1つである可能性、（3）教師からの主体的で協働的な探究の支援が子どもの義務尊敬や感情状態尊敬を促進する可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

尊敬（respect）は近年、世界的に注目されている社会情緒的スキル（非認知能力）の1つとして仮定されているが（OECD, 2015）、特に感情モード（感情的態度尊敬・感情状態尊敬）の実証的研究は国内外で希少である。他者を役割モデルに据え感情的に尊敬することは自身の成長・発達につながるだけでなく、文化の伝達・発展にも寄与することが仮定されてきた。本研究で教師からの主体的で協働的な探究の支援が子どもの義務尊敬や感情状態尊敬を促進する可能性が示されたことを活かし、尊敬の発達を促進する学級・学校環境の構築に役立てることは、子どもの成長・発達とともに文化の伝達・発展にも大きな役割を果たすと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Respect is important for our learning, social and moral development, and positive relationships with others, but few studies show how respect develops. We can experience three modes of respect: respect as moral duty (ought-respect), respect as an emotional attitude, and respect as an emotional state. Therefore, this research aimed to understand how the three modes of respect develop and how they are promoted by school teachers. As a result of examining three issues, the present studies found that (1) in terms of normative development of respect, elementary school students are more likely to experience emotional states of respect than middle and high school students, (2) parents' beliefs and talking to their children about teachers may potentially be one of the determinants of respect for teachers, and (3) teachers' support for children's autonomous and collaborative inquiry may promote the development of ought-respect and respect as an emotional state.

研究分野：教育心理学

キーワード：尊敬 発達 児童期 青年期 教師 非認知能力 社会情緒的コンピテンス

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

尊敬(respect)は多くの社会・文化で重要な美德とされてきたが(Haidt, 2012; Piaget, 1962) 尊敬とは何かに関して統一の見解はない。研究代表者は先行研究のレビューと実証的研究により、尊敬には少なくとも義務尊敬・感情的態度尊敬・感情状態尊敬の3つのモードがあると捉えてきた(武藤, 2014, 2016a, 2016b, 2016c, 2018)。義務尊敬は水平的(ヨコ)・階層的(タテ)関係における道徳的義務(義務モードの尊敬)であり、「尊重」という言葉に言い換えることができ、感情としての性質が希薄である(例:「人は互いに尊敬し合うべきだ」「教師を尊敬すべきだ」)。義務モードの尊敬は対人葛藤や怒りを抑制し、円滑な人間関係を構築・維持・促進するモードであることが示されてきた(e.g., Mayseless & Scharf, 2011; 武藤, 2013, 2018)。感情的態度尊敬と感情状態尊敬は感情モードの尊敬である。感情的態度尊敬は特定の優れた他者との関係性において一貫して保持される感情的態度である(例:「私はあの先生のことを尊敬している」)。感情状態尊敬は他者の優れた性質を称賛する一過性の感情状態である(例:「すごい。尊敬する」)。感情モードの尊敬は正当なタテ関係の維持(Haidt, 2012)や、次世代へのさまざまなスキル・知識の文化的な継承・伝達(Henrich & Gil-White, 2001)、優れた相手を役割モデルに据えた追従を通じた個人の成長(Li & Fischer, 2007)に重要な機能を果たすと仮定されてきた。研究代表者が現代日本の大学生を主な対象として実施してきた調査研究からは、(a)感情状態尊敬は他者の優れた知能・技術以外にも、優れた人柄や努力、熱意、気遣い、思いやりなど、近年世界的に注目されている多様な非認知(社会情緒的)能力の卓越性に対して生じ、自己向上や、相手を役割モデルに据えた追従を強く動機づけること(武藤, 2016c, 2018)(b)感情状態尊敬を経験しやすい大学生は、将来の自己像に向かって努力しやすく、主観的幸福感が高く、向社会的(思いやり)行動を行いやすいこと(武藤, 2018)(c)尊敬する人物のいる(特定人物に感情的態度尊敬を抱く)大学生が、尊敬する人物のいない大学生よりも将来の自己像が明確で、その実現に向けて努力していること(武藤, 2018)などが示されてきた。このように、尊敬の3つのモードにはそれぞれポジティブな社会的機能があるが、子どもが尊敬の3つのモードをどのように発達させていくのかは明らかでない。この問題を明らかにし、尊敬の発達を促進する環境構築に役立てることは、個人の認知・非認知能力の獲得・成長や将来の自己像の実現だけでなく、文化の伝達・発展にも寄与すると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、子どもの尊敬の発達の鍵となる存在として学校教師に着目する。教育基本法第二条(教育の目標)第三項に、「自他の敬愛と協力を重んずる」とあるように、他者を尊敬する心を身につけることは、元来、日本の学校教育の重要な目標の一つとされてきた。子どもにとって、学校教師は義務モードの尊敬の対象とも感情モードの尊敬の対象ともなり、他者を尊敬することの大切さを教わる身近な大人でもあるため、尊敬の発達における教師の役割を検討することは重要である。研究代表者の研究では、単に相手が年上であったり、親や教師という特定の役割にあたりただけでは、感情的態度尊敬や感情状態尊敬は経験されない可能性が示唆されている(武藤, 2018)。したがって、「教師を一般に尊敬すべきだ」という義務尊敬と、特定教師への感情的態度尊敬や感情状態尊敬を区別する必要がある。そこで、本研究では特に学校教師の役割に着目し、子どもの尊敬の発達過程と促進要因を明らかにすることを大きな目的とする。具体的には、研究期間内に下記の3つの課題を主に質問紙調査により検討することを計画した。

課題1: 他者への尊敬の標準的発達 小学生・中学生・高校生を対象に尊敬の標準的発達の様相を明らかにする。ここでは義務尊敬、感情状態尊敬の経験内容(感情エピソード)および経験しやすさ(感情特性)の発達の变化に焦点を当てる。

課題2: 学校教師への尊敬の規定因と教育的機能 小中高生を対象に、自身が感情的態度尊敬を抱いている教師の特徴とその教師の下で学ぶことの効果を検討する。

課題3: 他者への尊敬を促進する学級・学校環境 尊敬の3つのモードを促進する学級・学校環境を明らかにする。特に学校教師のどのような働きかけが効果的なのかを検討する。

### 3. 研究の方法

各課題に関して、当初の研究計画で予定していた調査研究はいずれもコロナ禍の影響で中止または変更せざるをえなかった。また、2021年11月中旬から2022年3月末まで研究代表者が育児休業を取得したため、その間は研究が中断した。以上の理由により、申請当初の研究計画を変更し、これまで研究代表者が関わった質問紙調査の二次分析や、成人を対象とするWeb調査も含め、尊敬の発達やその生涯にわたる影響を幅広く検討することとした。

(1) 課題1の研究手法 当初の研究計画で予定していた調査研究はコロナ禍の影響により実施できなかったため、研究代表者が以前関わった国立教育政策研究所の平成27~28年度プロジェクト研究「非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究」の一環として行われた児童期・青年期対象の約1年弱間隔での2時点の大規模質問紙調査(国立教育政策研究

所, 2017, 2018) の二次分析を実施した。

回答者と調査手続き 本調査は関東圏の 2 つの自治体の学校の小中高生とその保護者を対象とした。1 時点目 (2016 年 1~3 月) は小学生 (4・5 年生時) 3,066 名、中学生 (1・2 年生時) 3,089 名、高校生 (1・2 年生時) 5,585 名、2 時点目 (2016 年 11~12 月) は小学生 (5・6 年生時) 3,073 名、中学生 (2・3 年生時) 3,063 名、高校生 (2・3 年生時) 5,529 名に質問紙が配布され、調査票回収率は 1 時点目が約 85%程度 (76.9~96.4%)、2 時点目が約 85%程度 (71.2~96.6%) であった (国立教育政策研究所, 2017, 2018)。

調査内容 本研究に関係する調査内容のみ記す (全容は国立教育政策研究所, 2017, 2018 を参照されたい)。(a) 尊敬の感情特性 (感情状態尊敬の経験しやすさ) を測定する尺度として、Izard (1991, 1994) や Fredrickson (2003) などを参考に本調査で独自に作成された 13 種類の感情特性を測定する尺度 (各 1 項目; ポジティブ感情: 喜び・興味・誇り・感謝・尊敬; ネガティブ感情: 悲しみ・恐れ・恥・罪悪感・怒り・嫌悪・軽蔑・妬み) が使用され、尊敬感情特性は「ほかの人を見て、すごいなあと尊敬する気持ち」として操作的に定義された 1 項目で測定された。児童・生徒調査票では自己評定として、「まったく感じない」(1) ~ 「とてもよく感じる」(5) の 5 件法で測定された。保護者調査票では自身の子どもについて「まったく表さない」(1) ~ 「とてもよく表す」(5) の 5 件法で測定された (他者評定)。なお、感情特性は児童・生徒調査票では 1 時点目のみ、保護者調査票では 1 時点目と 2 時点目で測定されたが、本研究では 1 時点目を分析の対象とした。その他、(b) 向社会的行動を測定する尺度として愛他性尺度 (首藤, 1990) の一部の項目 (10 項目、3 件法; 児童・生徒の自己評定) SDQ (Goodman, 1997) 下位尺度の「向社会的性」(5 項目、3 件法; 保護者評定) (c) well-being を測定する尺度として日本語版 WHO-5 精神健康状態表 (WHO-5-J: Bech et al., 1996; Awata et al., 2007; 5 項目、6 件法; 自己評定) (d) 抑うつを測定する尺度として子供用抑うつ自己評価尺度 (DSRS-C: Birlleson, 1981; 並川他, 2011; 9 項目、3 件法; 自己評定) が 1 時点目と 2 時点目で使用された。また、(e) 感情知性を測定する尺度として EI 尺度 (箱田他, 2010; 12 項目、5 件法; 自己評定) が 1 時点目で使用された。

(2) 課題 2 の研究方法 課題 1 と同じく、国立教育政策研究所の平成 27~28 年度プロジェクト研究「非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究」の児童期・青年期対象の 2 時点の大規模質問紙調査 (国立教育政策研究所, 2017, 2018) の二次分析を実施した。

回答者と調査手続き (1) と同じである。

調査内容 本研究に関係する調査内容のみ記す。保護者調査票 (1 時点目) では (a) 教師への義務尊敬を測定する尺度として、教師への義務尊敬尺度が使用された。本尺度の 22 項目は保護者が子どもに対して、学校の教師との接し方についてふだんどのように言い聞かせているかを測定するために本調査で独自に作成され、「まったくあてはまらない」(1) ~ 「とてもよくあてはまる」(5) の 5 件法で測定された。また、(b) 家庭に関する基礎的な情報として家庭内の蔵書数、保護者の読書量、世帯収入、保護者の学歴を尋ねる項目が含まれていた。児童・生徒調査票 (1 時点目・2 時点目) では (c) 学習意欲を測定する尺度として自律的学習動機尺度 (西村他, 2011; 20 項目、4 件法; 自己評定) (d) 授業への積極的な参加を測定する尺度としてエンゲージメント尺度日本語版 (Skinner et al., 2009; 梅本他, 2016) の一部の項目 (8 項目、4 件法; 自己評定) が使用された。

(3) 課題 3 の研究方法 研究代表者が文部科学省研究開発学校運営指導委員 (2019~2023 年度) を務めた、お茶の水女子大学附属小学校 (以下、お茶小) における新領域「てつがく創造活動」の効果検証の一環である児童対象の 1 年間隔の縦断的な質問紙調査データに関して二次分析を実施した。本研究はお茶小が 2019 年度から毎年 11 月に実施している児童用調査データの二次分析である。研究代表者は質問票の作成に関わっているが、縦断調査のため、原則として同じ調査項目が使用されている。

回答者と調査手続き 本研究では 202X 年度の 5 年生 (翌年度 6 年生) の 1 年間の経年変化を分析の対象とした (個人情報保護のため明確な年度は伏せた)。202X 年度 11 月 (Time 1) は 103 名 (女兒 51 名、男児 52 名)、翌年度 11 月 (Time 2) は 102 名 (女兒 50 名、男児 52 名) が対象となり、各学級担当教員が集団形式で調査を実施した。

調査内容 下記の尺度に関して「全くあてはまらない」(1) ~ 「とてもあてはまる」(4) の 4 件法で回答を求めた。(a) 当該年度の「てつがく創造活動」の学びの達成度 (お茶小教員が独自作成; 「興味の実現」と「探究」の 2 因子 9 項目を分析に使用) (b) 当該年度の「てつがく創造活動」への感情的エンゲージメント (梅本他, 2016; 5 項目を改変) と行動的エンゲージメント (梅本・田中, 2012; 5 項目を改変) (c) 心理的 well-being 尺度 (西田, 2000) の自律性 8 項目 (一部改変) (d) メタ認知的方略 (押尾, 2017; 5 項目を一部改変) (e) 創造的態度尺度 (繁耕他, 1993) の協調性 10 項目、柔軟性 25 項目、(f) 尊敬: 特性尊敬関連感情尺度 (武藤, 2016a) の特性尊敬 18 項目の内、改変した 5 項目と、尊敬関連行為傾向尺度 (武藤, 2016c) の敬意表示を参考に独自作成した 4 項目を使用した。上記 (a) ~ (f) の各変数の内的整合性は一部低かったが概ね十分であった (Time 1:  $r = .50 \sim .92$ ; Time 2:  $r = .56 \sim .91$ )。

#### 4. 研究成果

##### (1) 課題1に関する研究成果

課題1に関しては主に下記の2つの成果が得られた。

感情状態尊敬の経験しやすさ(尊敬感情特性)に着目した二次分析では、尊敬感情特性1項目(「ほかの人を見て、すごいなあと尊敬する気持ち」)について自己評定と保護者評定により検討した結果、対象となった小学生(4・5年生)、中学生(1・2年生)、高校生(1・2年生)を通じて、自己評定でも保護者評定でも、小学生のほうが中高生よりも、また女子のほうが男子よりも尊敬感情特性が高い傾向が示された。

発展的に、尊敬感情特性の帰結を検討した二次分析では、重回帰分析の結果、小学生においてのみ、1時点目の自己評定の尊敬感情特性が、性別と1時点目の自己評定の向社会的行動(愛他性尺度)・感情特性(尊敬以外)を統制しても、2時点目の自己評定の向社会的行動(愛他性尺度)を正に予測することが明らかとなった。また、偏相関分析の結果、小学生においてのみ、1時点目の自己評定の尊敬感情特性が、(a)性別と1時点目の自己評定のwell-being・EI・感情特性(尊敬以外)を統制しても2時点目のwell-beingと正に関連する一方で、(b)性別と1時点目の自己評定の抑うつ・EI・感情特性(尊敬以外)を統制しても2時点目の自己評定の抑うつとは負に関連することが明らかとなった。すなわち、小学生(4・5年生)においてのみ、感情状態尊敬を経験しやすいほど、向社会的行動をしやすく、well-beingが高く、抑うつが低い可能性が示された。

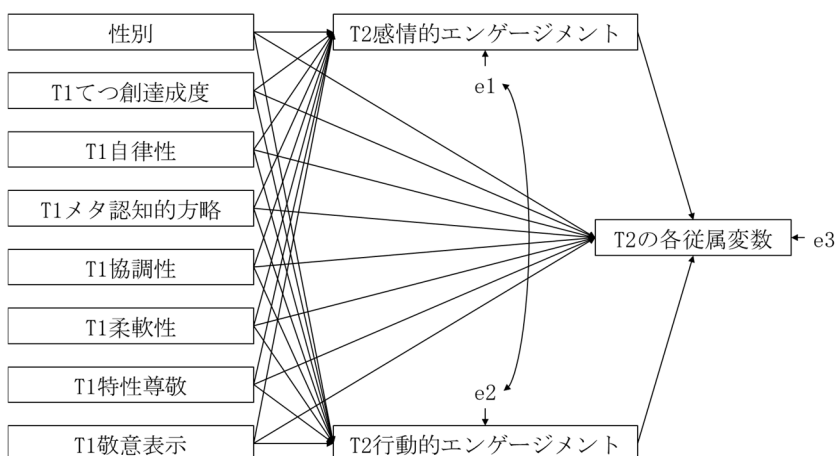
##### (2) 課題2に関する研究成果

課題2に関して、学校教師への尊敬の規定因と教育的機能に関わる分析を実施した。具体的には、学校教師との接し方についての保護者の言葉かけと児童・生徒の学業に関わる社会情緒的コンピテンスの関連を検討した。その結果、「学校の先生を尊敬するように、と子どもに言う」「学校の先生はあなたのことをわかっていない、と子どもに言う」などの、教師への義務尊敬に関わる1時点目の言葉かけ(保護者評定)が、2時点目の自己評定の小学生または高校生の学習意欲(自律的学習動機尺度)や授業への積極的な参加(エンゲージメント尺度)と一定程度関連することが明らかとなった。この結果は、保護者の学校教師に関する信念や言葉かけが、子どもの社会情緒的コンピテンスの獲得につながるだけでなく、潜在的に、教師への尊敬の規定因の1つとなっている可能性を示すものである。

##### (3) 課題3に関する研究成果

図1のモデルによるパス解析の結果を表1に示す。分析対象年度の6年生(T2)では5年生時点(T1)の変数を統制しても、当該年度(T2)のでつがく創造活動への行動的エンゲージメント(没頭)が高いほど特性尊敬(尊敬感情特性)と敬意表示(周囲への義務尊敬の表示)が高いことが明らかとなった。でつがく創造活動では、身近な事象や概念の意味や価値を主体的に探究する「でつがく」と、自ら計画し取り組むプロジェクト型の「創造活動」を融合し、子ども自らが学びを構想し、他者と関わりながら主体的に探究することでメタ認知・社会情緒的スキルを育むことが目標とされている(お茶の水女子大学附属小学校, 2023)。この結果は、教師がでつがく創造活動のような主体的で協働的な探究を支援することが子どもの義務尊敬や感情状態尊敬を促進する可能性を示しており、今後の研究展開を考える上でも意義深い。

図1 パス解析モデル



注。「でつ創造成度」は当該年度の「でつがく創造活動」の学びの達成度を意味する。全外生変数間に共分散を設定した(図示は省略)。同様のモデルでの分析を7つの従属変数(T2の達成度、自律性、メタ認知の方略、協調性、柔軟性、特性尊敬、敬意表示)ごとに検討した。

表1 パス解析結果

	T2の変数				
	感情的エンゲージメント	行動的エンゲージメント	てつ創達成度	自律性	メタ認知的方略
性別	-.09 ~ -.08	.08 ~ .09	-.02	-.03	.03
T1てつ創達成度	<b>.39 ~ .40</b> ***	<b>.32 ~ .35</b> **	<b>.17</b> *	-.10	-.10
T1自律性	.08 ~ .09	.00 ~ .02	.08	<b>.55</b> ***	-.01
T1メタ認知的方略	.15 ~ .16	<b>.31 ~ .33</b> **	-.04	<b>-.16</b> †	<b>.39</b> ***
T1協調性	.04 ~ .05	-.12 ~ -.09	.06	.05	-.06
T1柔軟性	-.10 ~ -.08	.06 ~ .07	.04	<b>.32</b> ***	.02
T1特性尊敬	<b>.21 ~ .22</b> *	.14 ~ .15	<b>.12</b> †	-.06	.06
T1敬意表示	-.09 ~ -.08	-.06 ~ -.03	-.02	.04	-.00
T2感情的エンゲージメント			.11	<b>.38</b> ***	-.01
T2行動的エンゲージメント			<b>.58</b> ***	<b>-.23</b> *	<b>.45</b> ***
R <sup>2</sup>	.28 ~ .29	.34 ~ .35	.67	.57	.48

	T2の変数			
	協調性	柔軟性	特性尊敬	敬意表示
性別	.00	-.08	<b>.14</b> †	.10
T1てつ創達成度	<b>-.22</b> †	-.02	.00	-.11
T1自律性	-.01	<b>-.16</b> †	.03	-.06
T1メタ認知的方略	.04	-.02	-.12	-.15
T1協調性	<b>.34</b> **	.03	.03	.06
T1柔軟性	<b>-.21</b> *	<b>.62</b> ***	.05	.12
T1特性尊敬	<b>.20</b> †	.06	<b>.47</b> ***	-.03
T1敬意表示	.04	-.06	.04	<b>.38</b> ***
T2感情的エンゲージメント	-.02	.02	-.11	<b>-.17</b> †
T2行動的エンゲージメント	<b>.35</b> **	<b>.27</b> **	<b>.41</b> ***	<b>.65</b> ***
R <sup>2</sup>	.34	.53	.48	.52

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$   $n = 102$

注. 値は標準化推定値。欠測値の処理は完全情報最尤推定法を用いた。

#### (4) まとめ

3つの検討課題で得られた知見の考察と本研究の限界点、今後の展望を簡潔にまとめる。

課題1：他者への尊敬の標準的発達 小学生は中高生よりも、また女子は男子よりも感情状態尊敬の経験しやすさ（尊敬感情特性）が高い可能性が示された。また、尊敬感情特性は特に小学生中高学年の向社会性やwell-beingの向上、抑うつ予防にとって重要である可能性が示された。今回は尊敬感情特性を単項目で測定した尺度を分析に用いたため、今後は多項目式尺度を用いた再検討が望まれる。また、子どもの尊敬の具体的な感情エピソードや義務尊敬の標準的発達については十分に検討できなかったため、今後の検討課題としたい。

課題2：学校教師への尊敬の規定因と教育的機能 保護者の学校教師に関する信念や言葉かけが潜在的に教師への義務尊敬の規定因の一つである可能性が示された。しかしながら、当初計画していた、子どもが感情的態度尊敬を抱く教師の特徴とその教師の下で学ぶことの効果については十分に検討できなかったため、今後の検討課題としたい。

課題3：他者への尊敬を促進する学級・学校環境 少なくとも小学校高学年段階において、教師からの主体的で協働的な探究の支援が子どもの義務尊敬や感情状態尊敬を促進する可能性が示された。ただし、感情的態度尊敬の促進要因や、教師からの支援の具体的内容に関しては十分に検討できず、本研究では1つの小学校しか研究対象としていないため、今後は多様な校種の多様な児童・生徒を対象に検討し、知見の一般化可能性を確かめるとともに、いかなる学級・学校環境が尊敬を促進するかをさらに明らかにしていきたい。

尊敬 (respect) は非認知能力の一つとしても仮定されているが (OECD, 2015)、特に感情モードの研究は世界的に見ても希少であり、その具体的な発達過程と促進要因、さらには向社会性やwell-beingへの帰結の一端を解明できた本研究のインパクトは大きい。なお、重要な進展として、研究代表者の2019年度の国際学会参加・発表が契機となり、他国の研究者とともに、児童期・青年期・成人期における尊敬の概念や感情の発達に関する国際共同研究を開始することとなった。本国際共同研究については現在も進行中であるため、結果の公表は差し控えたい。今後も研究を重ねて、尊敬の発達過程と促進要因に関する知見を得ていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Nakatani Hironori, Nonaka Yulri, Muto Sera, Asano Michiko, Fujimura Tomomi, Nakai Tomoya, & Okanoya Kazuo	4. 巻 14
2. 論文標題 Trait respect is linked to reduced gray matter volume in the anterior temporal lobe	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Human Neuroscience	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fnhum.2020.00344	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kawamoto Tetsuya, Kubota Komoto Aiko, Sakakibara Ryota, Muto Sera, Tonegawa Akiko, Komatsu Sahoko, & Endo Toshihiko	4. 巻 171
2. 論文標題 The General Factor of Personality (GFP), trait emotional intelligence, and problem behaviors in Japanese teens	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2020.110480	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原 大地、武藤 世良、杉江 征	4. 巻 89
2. 論文標題 ポジティブ感情概念の構造 日本人大学生・大学院生を対象として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 479 ~ 489
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.89.17049	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nakatani Hironori, Muto Sera, Nonaka Yulri, Nakai Tomoya, Fujimura Tomomi, Okanoya Kazuo	4. 巻 -
2. 論文標題 Respect and admiration differentially activate the anterior temporal lobe	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Neuroscience Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.neures.2018.09.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 森本 文人、山川 香織、白井 真理子、武藤 世良、松尾 朗子、真田 原行、高野 了太、小川 時洋
2. 発表標題 プレカンファレンス「われわれは測りたいものを測れているか？ 今後10年間の感情の主観・生理指標の測定に向けて 」
3. 学会等名 第40回日本生理心理学会大会・日本感情心理学会第30回大会 合同大会2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Muto Sera
2. 発表標題 Two kinds of respect from others differentially predict well-being in workplaces
3. 学会等名 10th European Conference on Positive Psychology (ECP2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯村 周平、久保田 愛子、榊原 良太、武藤 世良、利根川 明子、遠藤 利彦
2. 発表標題 児童生徒用向社会性尺度の作成
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江尻 桂子、齋藤 慈子、久保（川合） 南海子、仲 真紀子、武藤 世良、中島 伸子
2. 発表標題 ラウンドテーブル「ワーク・ライフ・バランスの話しよう（3） アンバランスやモヤモヤを見つめてみたらわかってきたこと」
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武藤 世良、白井 真理子、中村 真
2. 発表標題 心理学者は「情動」をいつから使い始めたのか？ J-STAGEを対象とした予備的検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第29回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋田 喜代美、成田 健一、伊藤 大幸、江尻 桂子、奥村 優子、中川 威、畑野 快、林 創、武藤 世良、氏家 達夫
2. 発表標題 誰もが無理なく楽しく活躍できる面白い学会とは？ 日本発達心理学会の将来を展望した研究活性化に向けて
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Muto Sera
2. 発表標題 How the conceptualization of feelings can be a shortcut to the integration of the component process model and the psychological construction approach
3. 学会等名 2020 SAS (Society for Affective Science) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白井 真理子、武藤 世良、中村 真
2. 発表標題 日本感情心理学会員が考える「感情とは何か」(1) 感情 = 情動なのか
3. 学会等名 日本感情心理学会第28回大会
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 武藤 世良、白井 真理子、中村 真
2. 発表標題 日本感情心理学会員が考える「感情とは何か」(2) ネットワーク分析の試み
3. 学会等名 日本感情心理学会第28回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 子どもの尊敬と憧れを社会化する親の実践 偏相関ネットワークによる探索的検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅原 大地、金子 迪大、武藤 世良、高野 了太、藤野 正寛、一言 英文
2. 発表標題 ポジティブ心理学における多様な感情経験
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武藤 世良、白井 真理子、山本 晶友、森 数馬、浦野 由平
2. 発表標題 今、改めて問う「感情とは何か」(3) 研究方法からみる「感情とは何か」
3. 学会等名 日本感情心理学会第27回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原 大地、武藤 世良
2. 発表標題 特性尊敬関連感情と理想自己のレパトリーの関連
3. 学会等名 日本感情心理学会第27回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Muto, S.
2. 発表標題 Five trait respect-related emotions differentially predict happiness in Japanese people
3. 学会等名 ISRE 2019: Conference of the International Society for Research on Emotion (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内山 伊知郎、有光 興記、中村 真、武藤 世良、樋口 匡貴
2. 発表標題 感情研究の広がり と 深さ
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 篠原 郁子、石井 佑可子、武藤 世良、久保田(河本) 愛子、利根川 明子、遠藤 利彦
2. 発表標題 非認知的(社会情緒的)コンピテンスの教育と展望(2) 学校要因と家庭要因による影響の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 親は子どもの尊敬と憧れの感情表出をいかに知覚するか テキストマイニングによる予備的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 利根川 明子、石井 佑可子、榊原 良太、武藤 世良、川本 哲也、河本 愛子、遠藤 利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの教育と展望
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 特性尊敬関連感情尺度の修正版作成の試み
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤 世良、白井 真理子、菅原 大地、小林 亮太、菊谷 まり子
2. 発表標題 今、改めて問う「感情とは何か」（2）感情の定義を創発しよう
3. 学会等名 日本感情心理学会第26回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤 世良、白井 真理子
2. 発表標題 感情の上位概念化に伴う個別感情の帰属問題 若手感情研究者を対象とした予備的検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第26回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井 佑可子、利根川 明子、榊原 良太、川本 哲也、武藤 世良、遠藤 利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの発達と展望（2）
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武藤 世良、白井 真理子
2. 発表標題 今、改めて問う「感情とは何か」
3. 学会等名 日本感情心理学会第25回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 尊敬による「自己ピグマリオン過程」とはいかなるプロセスなのか 大学生を対象とした短期縦断的検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第25回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 タテ関係における義務尊敬意識に性差と年齢差は見られるか？
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 現代日本の大学生における尊敬関連感情の生起要因と社会的機能
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小松 佐穂子、石井 佑可子、遠藤 利彦、武藤 世良、利根川 明子
2. 発表標題 情動知性 どう捉え、いかに育むか
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 特性尊敬関連感情尺度（青年期後期用）短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤 世良
2. 発表標題 日本の親は子どもの尊敬感情をどの程度奨励しているのか
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 利根川 明子、河本 愛子、川本 哲也、武藤 世良、遠藤 利彦
2. 発表標題 非認知的（社会情緒的）コンピテンスの発達と展望
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 監修：野島 一彦、編集委員：森岡 正芳、岡村 達也、坂井 誠、黒木 俊秀、津川 律子、遠藤 利彦、岩壁 茂、執筆者：武藤 世良（「感情」「感情知性」「自己意識的感情」の3項目を担当）他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 640
3. 書名 臨床心理学中事典	

1. 著者名 遠藤 利彦、武藤 世良、溝川 藍、榊原 良太、石井 佑可子、蒲谷 楨介、平田 悠里、野澤 祥子、西田 季里、久保田（河本） 愛子、利根川 明子、高橋 翠、本島 優子、石井 悠、松本 学	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 144
3. 書名 情動発達の理論と支援	

1. 著者名 秋山 美紀、島井 哲志、前野 隆司（編著）、武藤 世良他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 352
3. 書名 看護のためのポジティブ心理学	

1. 著者名 日本感情心理学会（企画）、内山 伊知郎（監修）、中村 真、武藤 世良、大平 英樹、樋口 匡貴、石川 隆行、榊原 良太、有光 興記、澤田 匡人、湯川 進太郎（編集）、武藤 世良他（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 480
3. 書名 感情心理学ハンドブック	

1. 著者名 荒木 寿友、藤澤 文（編著）、武藤 世良他（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 道徳教育はこうすれば もっと おもしろい 未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション	

1. 著者名 西村 純一、平野 真理（編著）、高橋 翠、小松 佐穂子、野澤 祥子、椿田 貴史、猿渡 知子、武藤 世良、川本 哲也他（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 156
3. 書名 生涯発達心理学	

1. 著者名 武藤 世良	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 446
3. 書名 尊敬関連感情の心理学	

1. 著者名 ステファン・G・ホフマン、有光 興記、武藤 世良、菅原 大地、日比野 桂、箕浦 有希久、榊原 良太、浅野 憲一、日道 俊之	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 心の治療における感情	

1. 著者名 遠藤 利彦、川本 哲也、榊原 良太、利根川 明子、武藤 世良、村木 良孝、河本 愛子、石井 佑可子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国立教育政策研究所	5. 総ページ数 96
3. 書名 質問紙調査結果に見る我が国児童生徒の意欲・態度等に関する調査研究に関する中間報告書 社会情緒的コンピテンス調査研究に係る分析結果報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

お茶の水女子大学研究者情報 <a href="https://researchers2.a.o.ocha.ac.jp/html/200000252_ja.html">https://researchers2.a.o.ocha.ac.jp/html/200000252_ja.html</a> researchmap <a href="https://researchmap.jp/seramuto/">https://researchmap.jp/seramuto/</a>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	North Carolina State University			